
私の恋の物語

直斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の恋の物語

【Zコード】

N7448Z

【作者名】

直斗

【あらすじ】

少女は恋がどのようなものかも知らなかつた

これはそんな少女の恋の物語

親友

私は月宮姫乃、15歳。

水蓮寺学園高等部1年生。

両親とは事情があつて一緒に暮らせない。

だから私は一人暮らしをしていて生活費は両親から仕送りされる。

「隼人、体調はどう?」

彼は早乙女隼人。

私の友達で学校も同じ水蓮寺学園高等部1年で三大財閥のひとつ早乙女財閥の御曹子。

「姫乃! 大丈夫だよ。 最近は落ち着いてる」

そして隼人は心臓が悪い。

無理をすると発作をおこす。

それが悪化して今は入院している。

「早く退院できるといいね」

「そうだな…早く外で運動したい」

「張り切りすぎてまた体調崩さないようにな」

「分かってる」

コンコン

「姫乃ちゃんちょっと来てもらえる?」

この人は隼人のお母さん。

おばさんは夕飯を誘つてくれたりする。

「分かりました。ちょっと行つてくるね」

「ああ」

「どうしたんですか?」

「隼人のことなんだけど」

「隼人の…こと?」

隼人のことと言わされた瞬間私は嫌な予感がした。

「ええ…」このままだと隼人は…あと三年もてば…いい方だつて嫌な予感は、当たつた。当たつてしまつた。

「そんな！だつて」

涙が出てきた。

「泣かないで姫乃ちゃん」
「あんなに…元気なのに」
「今もかなり無理をしているみたいなの」
「隼人が…あと三年でつて…そんなのつて」
言葉が出てこないくらい私は泣いてしまつた。

数分後

「落ち着いた？」

「はい…」

「私ね姫乃ちゃんにお願いがあるの」

「願い…ですか？」

「ええ。隼人は学校に行きたがつてるから母親としては行かせあげたいの…」

「…」

「でもあの子は一人でおいておけばきっと無理をしてしまつでしょう？だから姫乃ちゃんに隼人を支えてもらいたいの」

「私でよければ、必ず隼人を支えます。無理をしないように」

「ありがとう、姫乃ちゃん。それからこのことは学校のみんなには言わないでもらいたいの」

「え？どうして」

「もしみんなが知つてしまつたら、みんな氣を使うでしょ？」

「はい」

「それは隼人に今までと同じ態度で接しなくなるといつこと。それだけはさけたいの」

「そつか…やっぱり隼人のことよく考えてるんだな。おばさんは…」
「分かりました。みんなには言いません」

「本当にありがとう。姫乃ちゃんにばかりこんな辛い思いせでじ
めんなさい」

「気にならないでください」私は微笑みながら答えた。

ガラッ

「隼人。…寝ちゃったか。また来るね。おばさん、また来ますね」

「ありがとう。姫乃ちゃん」

「さようなら」

私はおばさんにお辞儀をし家に帰った。

もう一人の親友

翌日、私は昨日のことはなかつたかのように学校に登校した。

「姫ちゃんおはよー」

「おはよー」

「おはよう姫」

「おはよう」

「姫乃、おはよー」

「おはよ。林檎さがらいん」

彼女は相楽林檎。

私のもう一人の友達。

「昨日も隼人のお見舞行つてたの？」

「…うん」

「何かあつたの？」

あの事は内緒つて、言わないつて言つたから言ひちゃダメだよね…。

「何もないよ。」

「本当に？」

「うん。何かあつたらちゃんと林檎に相談する。林檎は親友だもん」

「わかった」

お昼休み、私は林檎とご飯を食べていた。

「なんか隼人がいないと落ち着かないな…」

「姫乃、隼人のこと好きなんじゃないの？」

「そつ、そんなんじゃないよ！私はただの… そつただの友達で… だから… その… とにかく違うの…」

「はいはい」

「それに… 隼人には好きな人がいるって話だし」

「直接本人に聞いたの？」

「直接は聞いてない… 聞くの怖いし…」

「やつぱり姫乃は隼人が好きなんだよ。だから聞くのが怖い」

「そう…なのかな」

「私は…隼人が好き? わからない…。今まで恋愛というものをしたことがないから。恋つて何なんだろ。」

「絶対そうよ。まあ確かに隼人つてあの大財閥早乙女グループの御曹子だしルックスいいし性格もいい人当たりもよくて最高の人だよね」

「うん…いい人」

「私も好きだつたんだ。隼人のこと。まあ好きつていうよりも憧れだつたのかなあ…告白したんだけどね。フラれちゃった」

「そう…なんだ」

「姫乃、どうしたの?」

「なんかこう…モヤモヤするつていうか」

「またブツと笑われた。」

「やっぱり姫乃は隼人が好きなんだよ。モヤモヤするのは好きな人が誰から告白されたりとか、付き合つちゃつたりしたときとかにそういうの」

「そつか…私、隼人のこと好きなんだ。これが恋なんだ」

「これが恋つてまるで今まで恋愛をしたことがないみたいな」

「ないよ、恋したこと」

「そうなんだ」

「うん」

「でも…そつか、姫乃は隼人のこと…好きなんだね」

「え?」

「私もね、まだ隼人のこと好きなんだ」

「…」

「昔からずつと。だから姫乃は私の恋のライバル。姫乃には負けない!」

「林檎…私は林檎が好き。林檎は大切な親友…だから林檎とは争

いたくない」

「姫乃つていつもそうだよね」

「…え？」

「林檎とは争いたくない。林檎は大切な親友つてキレイ事ばっかい
つてさ。バカじやないの？私は姫乃なんか大嫌い！姫乃はいつも私
の欲しいものを持つてる！姫乃はいつも…いつも私の欲しいものを
横から奪いさつていく！」

「そんな」

そんなつもりじやないのにと言おうとしたけどその言葉は林檎の言
葉に遮られた。

「ねえ、姫乃。私はね、この学校で人気者になろうと思つた。…で
も人気者になつたのは私じやないあなたよ！私が欲しいと思つもの
はみんなあなたの物。私はあなたの影の存在でしかない」

「そんなことない！林檎は可愛くて、頼りになるいい人だよ！」

「付き合つてらんない、私もうあんたとは話したくない。もう話し
かけないで」

「林檎！」

「話しかけないでつて言つてるでしょーあんたと話してるとイラつ
くの！」

私はそれ以上林檎に話しかけることができなかつた。

翌日私は林檎に話しかけようとしたがそれは遮られた。

「ねえねえ林檎」

「実果、どうしたの？」

「月富さんと林檎最近おかしいよ？」

「いいの。もうあいつとは話さない。決めたから」

「じゃあさ…」

「うん！いいかも」

結局、私は林檎と話せないまま隼人の家に向かつた。隼人の家は少し遠い。

「隼人」

「姫乃、来てくれたんだ」

「うん。退院おめでとう。明日からはまた一緒に登校しようね」

「ああ。…姫乃なんか元気ないな」

「…そうかな？元気だよ」笑いながら答えた。

「悩みごとか？」

でも…隼人には気付かれてしまった。

「…うん」

「相楽のことか」

「やつぱり隼人はすごいや。何でも分かつちゃうんだね」

「まあなんとなくだけどな」

「昨日ね、林檎にもう話しかけないでって言われちゃった。林檎は私が大嫌いなんだって」

「あんなに仲が良かつたのにな」

「どうしてこんなことに…」

「大丈夫。姫乃なら必ず相楽と分かりあえるよ」

「うん… ありがと、隼人。じゃあ私もそろそろ帰るね」

「ああ」

「また明日」

翌日

「姫乃、おはよう」

「おはよう隼人」

その時林檎が通った。

「あつ… 林檎おはよう」

林檎は「ちらを見たが応えてはくれず睨まれた。

「やつぱり… もうダメなのかな」

「大丈夫だよ。姫乃」

「うん…」

「昨日早乙女は病院を退院した。今日からまた一緒に授業を受けるぞ」

『1年A組早乙女隼人君至急学園長室に来てください』

「ちょっと行つてくるな」

「うん。じゃあ待つてるね」

「ああ」

「ねえ、伊藤さんちょっと来てもらひえる?」

隼人と私

私は放課後、隼人が学園長に呼ばれている間にトイレに呼び出されていた。

「あれ？ 姫乃？」

「姫ならさつき相楽達にどつかにつれてかれてたぞ」

「つ！！」

「隼人様、さつき姫ちゃんが使用禁止のトイレにつれてかれてたよ

「サンキュー」

「あんた最近調子こいてんじゃない？」

「隼人様にあんなに近付いて、何様のつもり？」

「どうせ早乙女財閥のお金目当てなんでしょう」

「ホント月富つてサイテー」

「林檎！」

「あんたなんか、私にひざまずけばいいのよ！泣いて謝つたつて私は許さない」勢いよく大量の水をかけられてしまった。

「林檎……」

「なあに？先生にいいつけるの？いいよ別に言いたければ言えば良いのよ」

笑いながら林檎は答えた。

「私はそんなことしない」

「生意気な」

また水をかけられた。

「こいつ抵抗しないの、つまんねえ」

「写真撮る。男子に売れる」

トイレにシャッター音が鳴り響いた。

その時だつた。

「お前ら姫乃に何やつてんだよ」

「はつ隼人様！」

「これはその…」

「その瞬間隼人はインスタントカメラを奪い取り壊した。

「お前らこんなことして恥ずかしくないのかよ！」

「隼人…」

「相楽もだー何でこんなことしてんだよ…お前は姫乃の親友だろ？」

「違う！月宮は…私から全てを奪つた！私の欲しいものも全部！」

「いい加減にしろよ！」

「隼人、もういいから…」

「良くない！」

「いいの！」

「…わかった。お前らさつさと帰れ」

「はい…」

「隼人は素早くブレザーを脱いで私に羽織らせてくれた。

「先生を呼んでくる」

「ダメ、先生は呼んじゃダメ」

「…わかった。お前つて今日はジャージ持つてきていんじゃないんだっけ？」

「うん。体育無かつたから…」

「じゃあちょっと待つてろ、俺の持つてくれる」

「うん…隼人、ありがと」

「そのあとすぐにジャージとタオルを持ってきてくれた。

「明日洗つてかえすね」

「いつでもいいよ。やっぱ俺のじゃでかいな」

「うん、ブカブカ」

「じゃ帰るか」

「うん」

「姫乃はさ、優しいよな」

「え？」

「自分がどれだけ被害を受けても先生には絶対に言わない」「そりやうかな」

「そりやうだよ。… なあ姫乃」

「ん?」

「母さんから聞いたんだろ?俺の」と

「…うん」

「俺も、お前と出会う前は一日一日を後悔しなことううに生きてきた。だからいつ死んでもいいって思つてた」

「そんなん…」

「でもお前と出会つてからは、違う。毎日がたのしくつてさ…もつと生きたいって思つんだ」

「隼人…」

「今日の放課後、学園長に呼ばれただろ?」

「うん」

「その時に教えてくれたんだ。学園長の知り合いことでも腕の良い有名な医者がアメリカにいるって…それで、もつと生きたいと願うなら一度アメリカで手術を受けないかって」「行くの?」

「母さんと相談してからだけどな」

「そつか…」

「ああ。じゃあな」

「うんまた明日」

(無題)

その日の夜隼人からメールが来た。

『アメリカに検査に行くことにした。そのあとのこととは検査してみないことには分からない』

『そつか。いつアメリカに行くの?』

『明明後日にアメリカに行つて検査入院する』

『明明後日なの!? また学校これなくなるんだね…』

『今日は検査だけだからすぐに帰つてこれる』

『そつか。じゃあまた明日』

『また明日』

そして隼人が検査入院するため渡米する日になつた。

「隼人、おはよー」

「おはよう」

「今日…なんだよね」

「ああ…まあすぐに帰つてくれるさ」

「うん」

「ねえ月宮」

「林檎…」

「隼人は?」

「今日からアメリカだけど」

「…え!? なんで?」

「心臓の検査に」

「なんであんたが知つてるの?」

「隼人が教えてくれた」

「…やつぱりあんたはズルい」

「林檎」

「月宮、私今度隼人に告白するから」

「…そう」

放課後

携帯なつてる…。

隼人だ！

『もしもし、姫乃』

『もしもし』

『アメリカについた。とりあえず検査入院して来週までには帰れる』

『そつか』

『じゃあまた』

「うん」

「月宮！隼人いつ帰つてくるの？」

「来週までには帰つてくるつて」

「そう」

「ねえ林檎」

「なによ」

「最近よく話してくれるね」

「…うつさい！」

それから数日後隼人から電話かかってきた。

『もしもし』

『もしもし』

『明日には帰れる』

『そうなの？』

『ああ詳しい事は帰つたら教える』

『わかつた』

翌日

「姫乃」

「隼人！おかえり」

「ただいま。上がつてくれ」

「検査した結果は…手術をして助かる確率は50%…生きるか死ぬか」

「そんな…」

「でも俺は行く。」
「うちでなにもしないまま死ぬよりはできる限りのことをしたい」

「そつか…いつ行くの?」

「春休みの間に手術しにまた渡米する」

「春…休み」

「手術は早い方がいいって言われたんだ…でも今年度は学校に行きたくと思って」

「そつか…。あつ私そろそろ帰らなきや」

「ああ。また明日」

「また明日」

「よお久しぶり」

「おお！隼人じゃねえか久しぶりだなあ！」

「隼人様！」

「隼人！」

「相楽…」

「放課後…屋上に来て」

「…わかつた」

「姫乃、ノートありがとな」
「うん」

隼人の想い、林檎の想い、私の想い、そして私の眞実

放課後

「屋上か…ちょっとと行つてくる。待つてくれ」

「…うん」

先に帰つた方がいいのかな…

「月宮さん、体育館裏に来てくれつて言つてる人いたよ
「体育館裏？わかつた」

「隼人！来ててくれたんだ…ありがとう」

「礼はいい。それより話つてなんだ？」

「私…私隼人のこと好き！だから付き合つて欲しいの」

「…悪い。俺、好きなやついるから無理だ。『ごめん』

「やつぱり月宮がいいんだね…月宮のどこがいいの？どうしてみな
な月宮が好きなの？」

「あいつは優しい。それに一緒にいると落ち着くし楽しいんだ」

「月宮なんか…死んじゃえればいいんだ」

「…え？」

「ほら隼人。体育館裏見てみなよ

「姫乃…」

「月宮囮まれちゃつてかわいそうに。あいつらに勝てるやつなんか
いない。この辺じやかなり有名なヤンキーだから」

「姫乃！」

「隼人が私と付き合つてくれたら月宮を助けてあげるよ？」

「お前いつの間にそんな最低なやつになつたんだよ」

「つ！だつて私はどんな手を使ってでも隼人と付き合いたいんだも
ん！隼人が好きなんだもん！」

「相楽…」

「みんな！久しぶりね、どうしたの？」

「姉御！もしかして姉御をシメろと言われたのか？俺らは」

「姉御に勝てるわけないだろ」

「そもそも姉御とやりあうわけないだろ」

「そうだよ。俺たちは姉御についていくと決めたんつす」

「誰が私をシメろって言つたの？」

「相楽林檎ツスよ姉御」

「そう…それともう私は姉御じゃないわ。ただの高校生だもの」

「でも俺たちが姉御を襲つて負けた日から姉御は姉御です」

「あなたたちは早く帰りなさい。問題になつたら困るでしょ」

「はい！姉御」

「どういうこと…？みんな帰つていつた」

「姫乃…良かつた」

「林檎」

「月宮…どうしてあいつら帰つていつたの…？」

「…姫乃」

「彼らは私の…私の元舎弟よ」

「舎弟…？」

「そう、舎弟。彼らは自分たちより強い人についていて自分たちより弱い人は従わせるつて感じのヤンキー集団だつたの」

「じゃあなんであんたはあいつらの上に立つてたのよ！」

「彼らが私にケン力を売つてきたの。夜出歩いている人にケン力を売るのが彼らのやりかだから」

「ケン力を買つたのか？」

「買つたわけじやないんだけど問答無用でケン力をふつかけてきたの。で、仕方ないから戦つた結果こうなつた」

「そんなバカな話…」

「聞いたことない？黄金の魔女つて名前」

「え…」

「あの…」この辺シメでたつて有名な？」

「そう… 黄金の魔女。私の二つ名。ホントは知られたくないかった…

黙つてごめん」

私は屋上から逃げるよう立ち去つた。

「姫乃！こんなとこにいたのか」

「隼人！なんで…来たの？この事知つたら怖がると思つて」

「姫乃が好きだから」

「…え？」

「俺は姫乃が好きだ」

「うそ…」

「うそじゃない。お前が好きなんだ」

「私は…私も…好き！ありがとう…隼人。でも…私は…」

私は貴方に伝えていない事がある。だまつていいことがある。たつたそれだけの言葉なのに言えない。

「俺はアメリカに手術に行く。だから…もしかしたらお前に辛い思いをさせるかもしれない…それでもいいなら付き合つてくれ…少しだけ待つてもらつてもいい？」

「ああ」

その日はおばさんが一緒に飯を食べようと誘つてくれていたので一緒に隼人の家に帰つた。

「今日は晩ご飯誘つてくださつてありがとう」「やつこます」

「気にしなくていいのよ」

私はこの人たちをこれ以上騙したくない…

「あの！」

「どうしたの？」

「大事な話があるんです」

「大事な話？」

「はい」

「大事な話つてなんだ？」

「…私は、お一人を騙していました。申し訳ありません」

「騙してた？」

「はい。…私は今までお一人に嘘をついて騙していました「嘘…とは？」

「お一人は一条財閥と鳴神財閥は「存知ですね」

「ええ。一応ライバルの財閥ですしパーティーなどでもよく「夫婦にお会いしますから」

「俺もパーティーとかで会うから知ってる」

「では4代目と5代目のことも当然「存知」ということですね」

「ええ」

「…彼らは私の両親です」

「…え」

「だつてお前こっち来たとき両親は亡くなつたつて」

「だから嘘をついていると申し上げたのです。私の両親は生きています。一条財閥4代目と鳴神財閥5代目が私の親です」

「ええ！？」

「マジ…かよ」

「でもパーティーなどいつも「夫婦だけで誰も傍にいなかつたわよ」

「それは私がパーティーなどにはいつも出席していなかつたからです」

「じゃあいすれは姫乃ちゃんが財閥の後を継ぐの？」

「はい。私しか後継者はおりませんので」

「…そうだったのね」

「一条財閥と鳴神財閥を合併して新たな財閥にする予定でその財閥の後継ぎとなります」

「姫乃が…」

「…私そろそろ帰りますね。少しずつでも家の片付けを始めないと」

「片付け？」

「はい。早ければ今学期の終わりに遅くとも来年度中には本邸にも

どるので…

「本邸に…」

「はい。本当にすみませんでした。… わよひなひ」

「姫乃！」

「隼人。ごめん… 私今までずっと嘘ついてて」

「いいんだ。それなりの理由があつたんだろ」

「… 私の両親は私と同じで幼い頃から財閥を背負うことが決められていた。でも私とは決定的に違うことがあつた」

「決定的に… 違うこと？」

私は静かに頷いた。

「お父様とお母様はお祖父様たちの間で勝手に決められた許嫁でいわゆる政略結婚だつたの」

「…」

「二人とも会うまでは親が勝手に決めた婚約者なんて嫌だつたんだつて。結局は結婚してよかつたって言つてたけどね。だから二人は私に嫌な思いをしてほしくないつて、私に普通の恋をしてほしつて」

「普通の恋か…」

「でも今日… 私の普通の恋は終わるんだつて思つた」

「どうしてだ？」

「だつて隼人に嘘をつけなかつた」

「…」

「私の恋はもう普通の恋じやない」

「それでも恋は恋だ」

「え？」

「俺の親も俺に普通の恋をしてほしつてね」

「普通の恋つて… なんなんだろ」

「… 思つたんだけど俺たちは俺たちにとっての普通の恋をすればいいんじやないか？」

「？」

「俺たちがみんなに会わせる必要はないんじゃないかってこと」

「…」

「俺たちは俺たちだ。俺たちの恋をすればいいんじゃないか？」

「そつか… そうだよね」

「だから姫乃… 俺と付き合つてくれないか？」

「うん」

その後、隼人は私の家まで送つてくれた。

「隼人」

「どうした？」

「私、学校今週で辞めることになつたの…」

「そつか…」

「だから明日で月宮姫乃是退学する」

「じゃあまた明日な」

「うん」

イツワコの終わり

翌日

「姫乃！」

「隼人おはよー」

「おはよー。今日で姫乃退学するんだよな…」

「うん。寂しい？」

「まあな。姫乃に会えなくなると思つと」

「まあ私が退学しても毎日会えるよ」

「そうだな」

「これで今日の授業は終わりだ。…そして残念な知らせだ。月宮前に出る」

「はい」

私は教卓の横に立つた。

「月宮は家庭の事情で学校を辞めることになった。月宮最後に挨拶を」

「はい。…」迷惑も多々おかげしましたが皆さん今までありがとうございました。また会いましょう

「…よし。じゃあみんな早く下校しろよ」

「姫…乃。その…今まで「めん。私、本当に酷いことして」

「林檎…」

「私、悔しかつた。姫乃は成績優秀で美人で姫乃なら隼人と釣り合う人間だつて思つた。私と隼人じゃ釣り合わない。ずっと悔しくて悔しくてたまらなかつた。成績優秀者は馬鹿を近付けないだろと思つて姫乃に近付いた。姫乃は他の成績優秀者とは違つて私にも優しく接してくれた。最初は嬉しかつたんだ」

「うん…」

「…でも近くに行けば行くほど姫乃は遠い存在だ、私には追いつくことはできないってわかった。そしたら急に怖くなつたんだ」

「怖くなつた？」

「うん。それであんな酷いことしちゃつた。今はすぐ後悔してる。ずっと謝りつゝて思つてたんだけどなかなか言い出せなかつた」

「…」

「だから最後に言つておきたかった。今まで「ごめん、先生に言わないでくれてありがとう。それから仲良くしてくれてありがとう」「気にしないで、林檎。それから私も仲良くしてくれてありがとう」

「姫乃、帰るか」

「うん」

「今度一緒に出掛けようか」

「そうだね。私たちはいつでも会えるもん。あ、でも明日、明後日は私本邸に帰らなきや行けないの」

「本邸に？」

「うん、今後のこと両親と話し合つてやるの」

「そつか…じゃあまたな」

「うん。気を付けてね」

翌日、私は一条家の本邸に帰つた。

「おかえりなさいませ、お嬢様」

「姫乃、おかえり」

「おかえりなさい姫乃」

「ただいま帰りました。お父様、お母様

「さあ上がりなさい」

「本邸に帰つてきたといつ」とお付き合つて居る方がいるといふことかい？」

「はい」

「お相手はどのような方なの？」

「お一人もよくご存知の早乙女財閥御曹司の早乙女隼人君です」

「ああ隼人君か。いい子だね」

「貴女はそれでいいの？」

「はい。それでお二人にご相談が…」

「わかつたわ。ちゃんと取り計らつておくわ」

「任せておけ、姫乃」

「ありがとうございます、お父様、お母様」

新しい日々のはじまり

月曜日

「ホームルームを始める前に転校生を紹介する。入れ扉が開いた瞬間教室はざわついた。

あれって…

うそだろ…

「転校生の一條姫乃さん。一條は一條、鳴神両財閥の嫡女だ」「初めまして。一條姫乃です。財閥のことは気にせず仲良くしてください。よろしくお願ひします」

「姫乃どうして学校に…」

「隼人、私は前にちゃんと言つたよ。“月宮姫乃”は退学するつて“ずりい”や。でもまた学校一緒に通えるんだな

「うん」

「姫乃」

「林檎！」

「本当に財閥の娘…なの？」

「…うん。騙して“ごめん”

「もう…会えないかと思った」

「林檎、今日の放課後空いてる?」

「うん、空いてるよ。でもどうして?」

「ちゃんと私のこと教えるから」

「じゃあ私の家にくる?」

「ううん。私の家に来て」

「えつ?いいの?」

「うん。もう隠し事はしたくないから」

「わかった」

「今日の帰りは車出してもうつから一緒に乗つていつて」

「うん」

放課後

「お帰りなさいませ、お嬢様」
執事の氷室が待っていた。

「林檎乗つて」

「う…うん」

「林檎、どうしたの？」

「これってリムジンだよね？」

「そうだけど」

「こういうのってテレビでしか見たことない…」
「まあ そうだよね。乗つて大丈夫だから。… 隼人もくる？」
「いや、俺はいい。一人でゆっくり話してこいよ」
「うん。あ、そうだ夜会の招待状届いてるよね？」
「ああ、だからまた後でな」

「うん。氷室、車出して」

「はい」

「お帰りなさいませ、お嬢様」

「用意はできております」

「ありがとう」

「ここで待つていて」

私はソファーに林檎を待たせて部屋に着替えにいった。

「姫乃様、お着替えお手伝いします」

「ありがとう、紫苑」

「本日はシンプルなTシャツなどですか？」

「いいえ…お嬢様らしいワンピースをお願い」

「珍しいですね。姫乃様がお嬢様らしいワンピースだなんて

「もう嘘はつかないことにしたの」

「このワンピースはいかがですか?」

紫苑は赤い襟元にファーがついたドレスのようなワンピースにを出してきた。

「うん。それでいい」

「髪はどうなさいますか?」

「そうね…編み込みをいれてくれる?」

「わかりました」

「待たせて」めんなさい」

「キレイ…」

「これが本当の私」

「すごくキレイだよ姫乃」

「ありがとそれで本題。私のこと教えるね」

「うん」

私は私の真実を林檎に話した。

私が財閥の娘であること、何故高校に通っているのかなどのすべてを話した。

「そつか… そうだつたんだね」

「本当に今までごめん。許してほしことは言わない、でももし良かつたらもう一度友達になつてほし」の

「私は…姫乃を許さない!」

「そつか…やつぱそつだよね…許してもりえるわけ…ないよね」

「…なんてね」

林檎はにっこり微笑んだ。

「え?」

「私は姫乃を許すよ。…だから友達になつてください」

「それはこっちの台詞だよ、林檎」

「ううん、私の台詞だよ。私は姫乃に嫌われても当たり前のこと

した。私は姫乃をいじめたんだから…。こんな私でもいいの？貴女を苦しめた私で本当にいいの？」

「うん」

「ありがとう姫乃」

「じつちこや… ありがとう林檎」

「あつ… もうこんな時間」

時計の針は6時を指していた。

「私そろそろ帰らないと」

「送つていいくよ」

「そんな悪いよ」

「悪いなんて思わなくていいんだよ。私たちは友達、でしょ？」

「うん」

「姫乃様」

「どうしたの？ 紫苑」

「奥様から」連絡がありました。ドレスなどは本邸に用意してあると

「わかつたわ」

「林檎、行こ」

「うん」

「氷室、車出して」

私は林檎の家住所を言った。

「わかりました。お嬢様」

林檎の家につき林檎を車からおろした。

「姫乃ありがと」

「ううん、じゃあまた明日」

「うん、また明日」

私は急いで鳴神の本邸に帰った。

「お帰りなさいませ、お嬢様」

「姫乃、早く控え室にいらっしゃい」

私はついてすぐにお母様に呼ばれた。

「はい、お母様。紫苑もきて」

「はい、姫乃様」

「はい、これ。貴女にぴったりだと思うのだけれど」

そう言つてお母様は桜色のイブニングドレスを差し出してきた。

「ありがとうございます、お母様」

私は桜色の真新しいドレスに着替えた。

「氷室！」

「お呼びでしょうか、奥様」

「祐希を控え室に早乙女さんたちを応接間に通してちょうだい」

「承知しました」

「紫苑、姫乃の髪をキレイに整えてあげて」

「はい」

「す、ごく可愛いわ、姫乃。やつぱり似合つわね」

「ありがとうございます、お母様」

ノックの音が響いた。

「奥様、早乙女潤様、鈴音様、隼人様を応接間にお通しました」

「ありがとうございます、氷室。あなた行くわよ」

「ああ」

「姫乃もよ」

「え？ あ、はい」

私は引っ張りられるよつてお母様につれていかれた。

「入るわね」

私たち家族は応接間に入った。

「久しぶりだな潤、鈴音ちゃん、それに隼人君も久しぶり」

「お久しぶり潤君、鈴ちゃん、隼人君」

お父様お母様が旧友の早乙女夫妻と隼人に久しぶりの挨拶をしていた。

「ああ久しぶりだな祐希、夜空もこの娘こなが姫乃ちゃんかい？」

私は挨拶をした。

「ご挨拶が遅れました。一条姫乃です。はじめまして早乙女潤さん」

私は隼人のお父さんに会つたことがなく今日初めて会つた。

第一印象はとても穏やかで優しそうな人だった。

「はじめまして、とても美しい娘だね、祐希と夜空の子どももなだけある」

「ありがとうございます」

「久しぶり祐君、空ちゃん、姫乃ちゃん」

「お久しぶりです。一条さん、鳴神さん」

「お久しぶりです、えつと…早乙女さん」

「おばさんでいいわよ」

微笑みながら言つてくれた。

「潤も鈴音ちゃんも隼人君から聞いていてるかい？」

「ああ、隼人が姫乃ちゃんと付き合つてていると」

「でだ、もしよかつたら隼人君と姫乃を婚約関係にしたいんだが…」

「婚約か…隼人はそれでいいのか？」

「ああ、姫乃ならいい、いや…姫乃じゃなきや嫌だ」

「潤、私も大歓迎よ。姫乃ちゃんはとても良い娘ですもの」

「そうか。なら俺もいい」

「じゃあ」

「ああ、姫乃ちゃんと隼人を婚約関係としよう」

「良かつたな、姫乃」

「うん、ありがとう」

「じゃあ私たちは先に会場に向かうわ、空ちゃん」

「うん、氷室。会場までお連れして」

「はい、奥様。」ちらりです早乙女様

「ありがとう」

そう言って早乙女一家は夜会会場に向かつた。

「姫乃、このペンダントを」

そう言ってお母様はシルバーのハート形になつていてモルガナイトが散りばめられているペンダントを私に差し出した。

「これは?」

「鳴神家は代々、婚約相手が決まつた娘にペンダントをあげるの。姫乃おめでとう」

「お母様…ありがとうございます」

「さあ、つけてあげるわ」

胸元にお母様がくれたペンダントが輝いた。

「会場に行きましょ」

そう言って会場に向かつた。

先にお父様とお母様が会場に入り夜会に来た方々の前で挨拶をした。
「皆様、本日は当家主催の夜会に来ていただきありがとうございます。本田は皆様に紹介する人があります」

「おいで」

お父様に呼ばれ私は舞台に出た。
会場にいる全員が私に注目した。

「私たちの娘です」

私は会場にいる全員に向かい挨拶をした。

「はじめまして、姫乃と申します。今までこのような場には私事があり出席できなかつたのですが本日やつと、出席することができます」

「ありがとうございました」

会場がざわめいた。

あれが姫乃ちゃんか

とても優しそうで美しい娘さんじゃないか

是非とも我が息子の嫁にもらいたいものだ

「そしてもう一人。我が娘の婚約者早乙女隼人君だ」

その紹介とともに隼人が舞台に出た。

「皆様お久しぶりです」

「二人は今日婚約関係を結びました。どうぞ二人を支えてやつてください」

会場は一瞬静まり返りその後拍手の音が会場に響いた。

そしておめでとうという言葉や隼人良かつたなどの言葉が聞こえた。

私が隼人を見ると隼人も私を見ていた。

目が合い私は微笑んだ。

すると隼人も私に微笑みかけてくれた。

その後私は夜会で他財閥の当主夫妻や「令嬢や」「子息など」と挨拶をし初めて出席した夜会は終わった。

夜会の後

夜会が終わるとお父様とお母様は早乙女夫妻と久しぶりの再会だったので沢山話をしたいらしく早乙女一家はそのまま鳴神の屋敷に泊ることになった。

「それにしてもまさか俺の息子と祐希の娘さんが婚約することになるとはな」

「本当だな、俺たち学生時代あんなに仲が悪かつのにな、夜空取り合つたり」

「今となつたら笑い話だがな」

二人は笑いながら話をしている。お母様もおばさんと話していた。その時隼人が話しかけてきた。

「少し外にでないか？」

「うん」

私たちちはお父様とお母様それに早乙女夫妻に断りをいれ、庭に出た。

「やつぱり少し寒いな」

風が吹いていてまだ少し寒い。

「隼人」

「ん？ 何？」

「その…病気の方はどうなの？」

「最近は落ち着いてるよ。発作もないし」

「そつか…ならよかつた」

「安心した？」

「うん」

私は安心したからか涙を流していた。

隼人はそれに気付き私を抱き締めてくれた。

「ごめん…俺がこんななんじやなかつたら姫乃に辛い思いをさせずにすむのに」

「隼…人」

「俺さ、今手術早めに受けにいこうかって考えてるんだ」「え?」

急によみがえつたあの日の声。

『手術をして助かる確率は50%…生きるか死ぬか』
「どうした?」

「う、ううん…何でもないよ」

笑顔で答えた。

「何でもないって顔してないぞ」

やつぱり隼人は気付いた。

「…隼人が…前に言つてた言葉…思い出して…生きるか…死ぬかつて…」

「姫乃」

そう言つて隼人は私にキスをした。

急にしてきたので私はビックリした。

隼人も私も顔を赤くしていた。

「隼…人?」

「大丈夫だ。俺は死はない。必ず姫乃のところに帰つてくる。だから…」

そう言つて隼人はポケットから小さな箱を出して私に手渡した。

「姫乃に。開けてみて」

私は小さな箱を開けた。

中にはシルバーにダイヤが数個散りばめられた指輪が入つていた。

隼人はそれをとつて私の左手薬指につけた。

「俺の婚約者つて証、婚約指輪だ」

「きれい…」

「俺がちゃんと働いて稼いだ金で買つた。父さんの手伝いをして、
だけどな」

「隼人が?」

「ああ。アクセ禁止じゃないとはいまだ学生だからあんまり目立

たないやつにしたんだ。それなら学校でもつけられると思って」

「ありがとう、嬉しいよ隼人。…愛してるよ」

そつと隼人にキスをした。

「俺も愛してる、姫乃」

隼人にその言葉を言われるとなんだかくすぐったかった。

そのあと少しだけ話をした。

「そろそろ体冷えちゃうし戻ろっか」

そのあと私たちはお父様たちのいる部屋に戻つて隼人の昔の話などを聞いた。

婚約解消の危機！？

翌日の朝、少し早めに起き早乙女一家と一緒に朝ごはんを食べ、私は学校に行くため着替えた。

もちろん指輪もつけている。

さつき気付いたけど同じ婚約指輪を隼人も左手薬指につけていた。早乙女夫妻はもう少しだけゆっくりしていくと言つたので隼人と一緒に車に乗り隼人の家に向かつた。

家に送り少し待つと隼人はすぐに制服に着替えて出てきた。

「車で登校することになるとはな」

笑いながら隼人が言つた。

「手前で停めて途中から歩いて行つてもいいんだよ？」

「まあいいんじゃないか？たまには」

「まあ…いつか」

そして校門の前に着いた。

氷室が車から降りると、最初の小さなざわめきが起きた。

あの執事の人カツコいい！

すごい美青年だよ！

「やっぱり手前で停めるべきだつたかもね…」

「まあ今更言つても仕方ないさ」

「そうだね」

私は笑いながら言つた。

氷室が車のドアを開けた。

「隼人様どうぞ」

という声がし隼人が車を降りた。

すると女子の声が響いた。

隼人様！

隼人様よ！

今日も隼人様はカツコいいね

「姫乃」

と言つて隼人は手を差し出した。
私はその手をとり車を降りた。
すると次は男子の声が響いた。
姫乃ちゃんだ！

姫！

今日も可愛いよ

「送つてくれてありがとう、氷室」

「これが我ら執事の仕事ですからそのようなお言葉は…」

と柔らかい口調で氷室は言つた。

「それでもありがとうございました。迎車はいいわ」

「わかりました。お帰りの際はお気をつけてお帰りくださいませ、
お嬢様。では、失礼します」

氷室は車に乗り別荘に帰つた。

「行こう姫乃」

「うん」

教室に着くと林檎がいた。

「林檎おはよ」

「姫乃おはよー」

「おはよう相楽」

「隼人おはよ」

「姫乃、その指輪、隼人もつけてるし…」

「あの…その、婚約指輪…なの」

「おめでとう！親友が幸せになつてくれるのは嬉しいよ…ちょっと
悔しいけどね」

「姫乃にくつついてくる奴も多いからこれをつけてる方がまだまし
になるだろうと思つてな」

「隼人と姫乃が婚約かあ…それにしても、愛されてるなあ姫乃。私
も早くいい人見つけよつと」

すると急に右手をつかまれた。

「姫乃様おはようございます！今日もお美しい…」
でた、クラス一気持ち悪い佐東隆宏、私の一番苦手な人だ。
何回告白を断つてもラブレターだとかを靴箱に入れるストーカーみ
たいな…。

すると隼人の声が教室中に響いた。

「姫乃にさわんじゃねえよ！」

隼人は佐東の手を払いのけた。

「ひい！すっすみません」

佐東は逃げていった。

「隼人、ありがと」

「当たり前のことだよ。俺の婚約者なんだから」

「ラブラブだね～二人とも」

「そうだ相楽と姫乃には先に話しておくことがある」
急に隼人が緊張したような顔で言った。

「「なに？」」

私たち二人は同時に言った。

「俺、渡米する日を早めることにした」

「…そつか」

「いつ…行くの？」

「今月末に」

「一週間後つてこと？」

「ああ」

「一週間…後」

授業がすべて終わつた。

「姫乃、帰ろう」

「うん、隼人」

「じゃあね姫乃」

「林檎一緒に帰らないの？」

「うん一人の邪魔しちゃ悪いから
笑いながら林檎が言う。

「そつか…じゃあね林檎」

「姫乃？暗い顔してどうしたんだ？」

「隼人が一週間後にいなくなると思うと…」

「大丈夫、言つたろ？俺は死ない」

「うん、でも手術ってどのくらい向こうにいるの？」

「体調を見たりしながらだからな…一週間くらいかな」

一週間…ってことは隼人の誕生日は祝えないのか…

「一週間か…寂しいな」

「俺だつて寂しいよ、でもこれからのことを考えるなら早く手術をして姫乃を安心させたいんだ」

そう言つて手を繋いでくれた。

「…ありがと隼人」

「泣くなよ姫乃」

「え？」

「涙でてるぞ」

頬を涙がつたつていた。

それを隼人がぬぐってくれた。

「お前は笑顔が一番似合うんだから」

「うん」

その後隼人は家まで送つてくれた。

「じゃあまた明日な」

「気をつけてね、また明日」

「ああ」

翌日になると私と隼人が婚約したという話が1日で全校生徒に広まつていた。

「林檎おはよう」

「おはよう姫乃、隼人も
「おはよう相楽」

「姫ちゃん！ 婚約おめでとう」

「あ、ありがとう」

「隼人もよかつたなあ、姫ちゃんと婚約できて」

「ああ」

祝ってくれる人もいた。

でも嫌味を言つてくる人もやはりいた。

そして問題が起きた。

「いい気なもんよね 一条姫乃サン隼人様と婚約なんて… 騙してたくさん
せに！」

「亞理彩やめた方がいいよ 一条さん、 一条家と鳴神家の『ご令嬢なん
だから』

「だからなんだつていうのよ！ 家名に守られてるただのお嬢様じゃない！ 学力だつて普通で何で学年トップの私より 一条なのよ…」

イラつと来た。

亞理彩さんは私が一番嫌いな言葉を言つてしまつた。

「亞理彩さん…」

「一条姫乃！ 私と明日の実力テストで勝負しなさい！ 私が勝つたら、
隼人様と別れなさい！」

「いいわよ、私は勝つから。… その代わり私が家名に守られると
かそういうこと、言わないでくれる？」
家名に守られてる。

それが私の一番嫌いな言葉。

「生意気な！」

「なんなら学年トップつていう制限をつけてもいいわよ」

「ふざけんな！ いつも真ん中らへんの成績なくせに」

「姫乃…」

「大丈夫、絶対に勝つから」

笑顔で隼人に答える。

その日の帰り道。

「本当に大丈夫なのか？いつも真ん中らへんの成績しかとつてないのに…」

心配そうに隼人が言つてきた。

「うん、言つてなかつたんだけど…私普段わざとあのくらこの点とつてるの」

「え？」

「財閥の第一子は財閥を継ぐから当然英才教育を受けるでしょ？」

「ああ… そついえば。姫乃受けてたのか」

「うん。14歳くらいの時で大学卒業までの学問はだいたい修めたの」

「じゃあ大丈夫か」

「うん、だから安心して」

翌日、実力テストを受け、その翌日には結果がでた。

私の成績は…学年全体、学年女子共に全教科満点で900点の1位。亞理彩は学年の女子で2位829点。

学年では3位だった。

理由は隼人も私と同じで全教科満点の900点だったから。

「そんな…私が負けるなんて…」

「約束、守つてね」

「さすが姫乃だな」

「じゃあね亞理彩さん」

「ひーめーの！」

「林檎…ビックリしたあ」

「学年1位つてす”いね！どうやつたらあんなに良くなるんだか…」

「私、小さいときから英才教育受けてたから」

「そつなんだ…やっぱり財閥の娘なんだね…」

「」の騒動はすぐに終わつた。

私が学年トップをとつたという事実が亞理彩さんにはよほどこたえたらしくまぐれだと思うようにしたらしい。

…が、その後も私は学年トップをとりまぐれだと思えなくなりつかかつてくることはなくなつた。

それから隼人の渡米の日まで、私たちは毎日を大切に過ごした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7448z/>

私の恋の物語

2012年1月14日21時54分発行